

## 「日本の下層社会」

横山源之助(著)

岩波書店 1949年5月30日刊

三浦展氏の『下流社会』（光文社新書）がよく読まれているという。そこで描かれている下流層とは若年層で生活水準と意欲が低い人々を指しているが、この人達は社会の下層にいたるのではなく、中の下あたりにいる人々のことだそうである。

しかし、社会政策として社会の二極化を考えるとすれば、最貧層の実態を知る必要がある。僅かな消費者ローンの返済取り立てに絶望して命を落とす人達や看取る人もなく孤独死する人々、職を失った路上生活者が増えている社会をわれわれが結果として生み出していることをどう考えればいいのか。

現在の格差社会や貧困層の拡大問題を考える上で、今から100年以上前の1898年（明治31年）に横山源之助によって丹念に調べられた我が国初の貧困層に対する社会調査、ルポルタージュである『日本の下層社会』を再読することをお勧めしたい。

横山源之助は東京の貧民の生活状態、職人、手工業労働者、工場労働者、小作人事情について調査を行い、さらには、失業者、未就業者らの労働予備軍の実態についても言及している。そこで調べられているのは賃金や生活統計のみならず、職位別の労働実態、労働契約や自由時間の有無、労働者の教育水準など実に細かい点にまで及んでいる。

彼の調査方法は、自ら現場に行き、聞き取り調査を行うというものである。随所に出てくる貧困層の生の声が本書の価値を高めている。横山が貧民の実態に肉迫しているがゆえに貧困解決策として挙げている、(1)貧困者向け融資金融機関の設置、(2)貧民への教育の拡大、の2点は極めて具体的であり現実的要請も高いものとなっている。

さらに、横山は、日本の貧民の実態は、資本家に搾取されて生じた経済貧民というより、教育不足や自立心の欠如による人生の不幸者であり、その問題を改革すれば、貧困問題は解決できるという立場をとっていた。当時の風潮としては社会主義に傾倒しても不思議ではないなか、社会主義的立場を取らなかったことは特筆に値する。これは、横山が貧民の実態を観察することによって、日本における貧困の本質を理解した上でたどり着いた冷静な判断であった。

現在の貧困層の拡大 不平等の拡大という事象を政府統計やマーケティングの意識調査の結果だけから主張したり、逆にそれを他の統計で批判するだけでは不十分である。横山が行ったように現場に行つてその実態を正確に記録することが必要であり、実態を把握して初めてその具体的解決方法が出てくることを本書は教えてくれている。